

氏名	アサンテ ベル ASANTE Belle
学位(専攻分野)	博士 (地域研究)
学位記番号	地博第63号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻
学位論文題目	Community engagement in cultural heritage management : Case studies of museums in Harar and Addis Ababa, Ethiopia (地域住民による文化遺産管理の取り組み —エチオピアのハラールとアジスアベバにおける博物館活動の事例—)
論文調査委員	(主査) 准教授 重田 眞 義 教授 市川 光 雄 教授 太田 至

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代エチオピアにおける博物館活動に焦点をあて、文化遺産の保全と管理をめぐって地域住民と行政の当事者のあいだで繰り返される交渉とその帰結についての位置づけを試み、地域住民主体の文化遺産管理の特質を浮き彫りにしたものである。また、エチオピアにおける博物館活動を、文化遺産の管理に関わる社会的な営みととらえる視点から、国と地方それぞれのレベルで実証的な比較検討をおこなっている。これまで約1世紀にわたって、文化遺産の公開展示を国や地域の当事者がどのような目的でおこなってきたかを分析し、国家の政治状況が文化遺産の多文化的表象にどのような影響を与えてきたかを考察している。さらに、博物館活動における地域住民の多様な取り組みについての分析をとおして、地域住民による文化保全活動と、外来の文化開発計画との間にみられる齟齬についても論じている。

第1章では、博物館学、物質文化研究、文化人類学など博物館に関連する専門分野の理論・方法論について検討し、博物館活動の研究における学際的研究の重要性を指摘している。

第2章では、まず「博物館」概念の歴史的・世界的位置づけをおこない、つづいてアフリカ各国の博物館に対する西洋世界からの影響について検討した。近年アフリカにおいて一般市民向けのサービスを強く意識した博物館の再組織化がおこなわれていることも考慮し、アフリカ各地で豊かな在来芸術作品を活用して、より地域密着型の展示がおこなえるように収集品そのものの構成が再編されていることの意義について考察している。

第3章では、エチオピアの首都アジス・アベバにおける文化遺産管理の事例をとりあげ、特に国家レベルの博物館展示にみられる傾向に注目して他のアフリカ諸国との歴史的な比較をおこなっている。首都に位置する代表的な2つの博物館を対象とした事例研究では、エチオピアにおける集権的な管理の実例を明らかにした。

第4章では、地方の博物館に視点を移して、博物館活動に対して地域住民のイニシアティブが特に顕著なハラールの事例に注目して分析をおこなっている。その結果、地域住民が博物館に収集品を寄贈したり、博物館を公的あるいは私的な教育活動の場としたり、博物館内で作品を製作したりするような様々な行為が、博物館の管理活動と密接に結びついてきていることを明らかにした。同時に、ハラールの地域住民によるこうしたイニシアティブが、博物館と在来システムとの連携の上に築かれた現代の文化遺産管理の代表的事例であることを示している。こうしたハラールの事例からは、住民の特異な歴史的経験と同時代的な営為が出会う場として、様々な当事者が「博物館」を育てるために協調してきたことが明らかにされた。また訪問者の統計や記帳記録からは、エチオピア市民がこうした博物館活動の第一の受益者であることが示されている。

第5章では、エチオピアの国家レベルで管理されている博物館と、地方の博物館について、歴史的な基盤、管理方法、目的、資金、地域住民の参加の程度に関する比較をおこなっている。両者には共通点もみられたが、ハラール市内の博物館活動には、文化遺産の管理において西洋モデルに依拠しない、例外的ともいえる地域住民のイニシアティブと、地域住民が保

全する豊かな文化資源が反映されているという点で、国家管理の博物館とは大きく異なっていることを明らかにしている。最後に、ハラールでの博物館管理の成功事例に基づいて、地域社会の当事者たちが、持続可能なやりかたで文化遺産を維持していく能力を向上させることができるように、文化遺産に関する政策と開発計画を改変するための提言をおこなっている。

論文の末尾に、アフリカ芸術のコレクションとアフリカの博物館活動に関連した文献と資料のリスト、および本論文でとりあげられた国営および地方の博物館の写真資料が付されている。

論文審査の結果の要旨

アフリカにおける博物館の役割への問いかけは、1960年代にアフリカ諸国が植民地宗主国から独立をはたした時代に始まる。当初はオリエンタリズム的なまなごしに支配された「アフリカ伝統文化」の陳列場所を、いかにして「アフリカのための博物館」として再興させるかが求められた。しかし、奪われた文化遺産のとりもどしや植民地表象の破壊という過激な主張の陰で、住民主体の文化財保全の試みがアフリカにも存在してきたことはあまり注目されてこなかった。

これまでアフリカの博物館に注目した研究は、少数の例外を除けば、個別の博物館の資料とその展示内容に関する博物館学的なアプローチに限定されてきた。申請者は、エチオピアの宗教都市ハラールにある民営博物館の一角において伝統的な籠作りをおこなう女性グループの長期参与観察をおこない、自ら籠作りを経験しながら、工芸品を創造する人びとの営為をつぶさに観察し、地域社会の中で継承され変容してきた在来技術の実践を、地域の文化・社会・歴史的な文脈に位置づけて理解しようとしてきた。本論文は、このような研究背景のもとで、地域住民を主な当事者として博物館を舞台に繰り広げられる文化遺産管理の取り組みを、博物館管理活動に関わりながら、国や地方行政による博物館運営と比較しつつ、細やかに記述・分析したものである。地域住民の生活実践と彼らによる主体的な文化財保全の試みとのあいだに深いつながりがあることを説得力をもって描いた優れた研究である。

本論文のなす学術的貢献は、以下の4点にまとめられる。

第一に本論文は、現代エチオピアにおける博物館活動を対象にした最初の地域研究としてきわめて貴重な事例を提供した。特にハラールの住民のように民営の博物館に対して自主的に高価な文化遺産を大量に寄贈・預託するという事例を記載し、その意味を検討した研究は、エチオピアは言うに及ばず、アフリカ諸国の博物館活動においてもほとんどない。

本論文の第二の貢献は、地域住民による文化遺産の保全管理活動が、政府や国際機関のイニシアティブではなく、ハラールに住む年配女性や工芸グループなどによって構成される在来組織を媒介にした社会的連帯や経済的貢献によって支えられていることを実証的に明らかにした点にある。また、その活動の動機が、アフリカの都市住民に備わる、モノ（物質文化）への独特の嗜好性に求められるとした分析結果は、今後のアフリカにおける住民参加型の博物館活動に対して実践的な研究をする際の指針と可能性を示すものである。

本論文の第三の貢献は、エチオピアの地域研究において、博物館における文化遺産の保全管理をめぐる政府の文化政策と国際的な文化開発の潮流、それらに対抗する地域住民の文化実践といった、複数の当事者間の諸関係とその変遷をとらえるという新たな切り口を見いだした点にある。

第四番目としては、申請者がハラール住民による文化遺産管理の取り組みに関する研究成果をもとに、現地のユネスコ事務所においてインターンシップをおこなうなど、調査対象地域の博物館運営と文化遺産保全管理に積極的に関与してアクションリサーチをおこない、さらにその結果をもとにして今後エチオピアにおいてとりうる文化遺産管理の方策について五項目の提言をおこなっている点がある。研究と実践を架橋する実践的地域研究の成果として著された本論文の特筆すべき業績のひとつとして高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。